
異世界管理人LEOPARDO

夏風幸夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界管理人LEOPARDO

【Nコード】

N7082S

【作者名】

夏風幸夜

【あらすじ】

異世界は一つじゃない．．．異世界は星の数ほど、いやその何万倍の数がある。それを管理するモノ、異世界管理人のレオと相棒のムンドが色カラーが大好きな少女、シキと出会っているいろいろな異世界に行く楽しく可笑しく不思議なお話！

P r o l o g o (前書き)

この小説を選んでくださりありがとうございます。
どうか楽しんでください

Prolog

ねーねー 母さん

どうしたの？ もうおねんねの時間でしょう？

うん、おねんねするまえにまた『あのおはなし』のおはなしきかせてー

また？ 本当に好きだねえ、『あのお話』

だっていつもいつもちがったおはなしだからあきないのー！ おもしろいおはなしとかぼっけんのおはなしだとかかつこいいおはなしとかあるんだもん．．．たまにこわいのもあるけど。

あら、いつもお話しているお母さんも気がつかなかったわ．．．じゃあ、今日は最初からにするー？

—— っぴー！

—— …ふふ、じゃあはじめるね

この物語を始める前に一つ教えましょう

世界は本来、異世界と呼ばれるモノ

その数は星の数よりも多いと言われており、
すべて似てるよ
うで同じではないモノとまったく違うモノがある

生物はその事を知らない

でもほっといたら異世界はこわれちゃう

そんな事にならないように異世界を管理をするモノ『異世界管理
人』が異世界がこわれないようにする

でも異世界一つ、その世界そのものを背負っているのと同じだ
から簡単なことじゃない

色々な条件をそろい異世界を渡る力もらって見事、異世界管理
人になれるのだ

そんな異世界管理人の少年と少年が仕事さきで出会った少女の物語の

冒険
ある
でもない
でも

ファンタジー
ある
でもない
でも

SF
ある
でもない
でも

ホラー
ある
でもない
でも

もしかするとどれ一つも当てはまったり、当てはまらないか

もしれない

そんな色々なものがゴチャゴチャしているけど

楽しく可笑しな物語がはじまる

P r o l o g o (後書き)

楽しめましたか？

できたら感想を書いてくださると嬉しいです。

異世界管理人 壱（前書き）

遅れてしまいましたがどうぞ！

異世界管理人 壱

最初のお話は主人公である少年と少女の出会い

ほぼ平和、勉学、食、娯楽と何でも揃う町

町に囲まれているのはビルだらけで

住宅街に来たとしてもほとんどが間違えて自分の家を間違えるような
なほば変わらないほど似ている家ばかり

そのビルや住宅に住んでいる者達は未来に歩いているのではなく意
味もなくさ迷っているように ズル ズル とだらしなく歩く

空もその心を表しているような汚い灰色でそのせいか誰も上を向
かない

そんな寂しい町で・・・いや、異世界で少年と少女は出会った

始まりは少女の夢からだった

はじめまして、私はシキっていう名前！

何か『色を創り、生み出す者』という意味らしい．．．何かのふとそれが浮かんで色と書いてシキという名前が付けられたんだって

あ！ でもあの『色気』のじゃなくて、赤とか青とかの『色』だからね！後『死期』とかもちがうからね！

あんな、破廉恥なやえんぎでもない意味もっていたら親を殴り飛ばしてその意味を自分で変えてもらうつもりだよ！

でも本当変な名前を付けられたね、私

話が変わるんだけどいつか分からないけどものすごい町にいるの

ワイワイ

ペチャクチャ

ガタガタ

ガン！

ガヤガヤ

キヤーキヤー

ゴトッ！

ビューン

賑う人々、活気があってとても楽しそうな町

だけど．．．私から見たこの町並みは異常だった

七色、いやそれ以上の色を出している見たことない空

色取りな家に空中に浮かぶ小さな島

何処が上か下か分らない

人が逆さまに歩いたり、飛んだり、泳いだり

角が生えている厳ついが気がよさそうな男

綺麗な羽を持つ優しいそうな少女に3メートルぐらいの大きさに

素晴らしい毛並みを獣などが普通に歩いている

そんな色々なものが、人が、常識がゴチャ混ぜな町並みは不思議と違和感がない

私がいつも目になっている薄汚れた色しかない平凡な町並みと180度違う

学生だけど画家である私はいろんな想像するけどこんな光景を見たことのない

その町を興味津々で見っていた

みている内にふとある少年の後姿に目に留まった

一番目立ったのが白い髪の毛・・・だけど影がある所は黒、たとえば薄い影でも真っ黒だった

そんな不思議な髪を持つ少年は後ろから見ても分かるほどふあーっと大きな欠伸をして頭をボリボリとかいて

肩にいる黒くて小さな生き物を撫でた

その生き物は私の目にはヌイグルミみたいに小さくて可愛い黒猫ちゃんに見えた！

さらに撫でられている事によってゴロゴロと喉を鳴らして気持ちよさそうにしている！

可愛い！！

しばらく黒猫ちゃんを撫でていた少年は行き成りなにかを唱えた

その何かを唱えていたのははっきり聞こえなかった

でも唱えた後の言葉は聞こえた

「今日はどの異世界を管理しようか？」

そういつたら黒猫ちゃんが突然光って、少年はその光に飲まれて消えた

「ちょっと待てー！ー！ー！！ 何で生き物が光るの！？ しかも黒猫ちゃんなのに！？ っていうか何それ！？」

そう心の底から叫んで突っ込んだ

すると先ほどまでに見ていたその不思議な景色が寝る時と起きる時に良く見る自分の部屋の天井に変わった

私はその事にびっくりしてあたりを見渡した

全体的に白いが色々な色が塗られてカラフルでこれまたごちゃごちゃしてなくて不思議な部屋・・・自分の部屋だった

「・・・本当になんなのあの最後のオチ、ってしかも夢って」

それにしても非現実なのに現実リアルすぎよあの夢、一体なんの意味があるの？

と考えていたらさっき叫びながら突っ込んだ事を恥ずかしく思い、私は自分の部屋で寝ていた事を思い出すとノロノロとベッドから出て歯磨きと顔洗って

自分の部屋に戻って私の好きな事、いろんな色を使って絵を描くのを昨日の夜からまだ未完成の新作の絵を描いている

未完成の絵は窓から見える景色

でも色あせた世界なんてなにに使えるのか想像できない、どこから

イメージが湧き出るの？と言われそうな感じだけどキャンバスに描かれているのはその景色は

赤色 青色 黄色 緑色 紫色 藍色 茶色 淡紅色 金色 銀色
黒色 白色 灰色

などとまるでこの世の全ての色を使いモデルになった色あせた町が、世界が180度変わってゆく

まだその未完成の絵を少女は筆とさまざまな色のついたパレットを手にし、筆を動かす

サラサラと色を重ねて

ペタペタと色を付けて

チョンチョンと手で色を整っていく

その動きはまるで色で命を吹き込み

そのキャンバスの中で世界を完成させている様に見える

絵を描いている時の私はまるで自分じゃないみたいでこの時が好き

自分はちっぽけな存在だけとおおきな事をしている気分になるんだ

そして何十分経ったんだろう・・・目の前の絵が完成した

後は自分の生を書いて終了！

今回は早めにおわったーっと思いつながら最後に自分の名前をかく

「んゝ、『SHIKI』っ！ かんせー！！ っていい出来じゃない？」

名前を書いて初めてそのでき前を見る

そのキャンバスの中は自分で言うのもなんだけど・・・幻想的だ

色に命を吹き込んだものがまるで自我を持っていて一つ一つの色が存在を持っているように見えて

遊び心を使って四角い建物だけではなく丸い建や三角の建物も描いた

そしてみんなが見上げるような真っ青な空と真っ白な雲が本物の青空と勘違いしそうな色使いに仕上がっていた

完成品を見て私はいつも無意識に

『まるで名前の由来通りに色を創って産み出して、世界そのものをその色で塗っている』

とそういう感覚がくる

だが今日はそれ以上の感覚が襲ってきていた

それはまるで片割れが近くにいて引つ張られる感覚

ビリビリ！ と電気が体中に来た感じがしたけど気のせいだと思ってキッチンへと足を運んだ

「ミルさん、おはよう」

「おはよう、シキちゃん」

対面式のキッチンに行くとこの家の主でお店を経営しているミルさん

私の親は生きているけどどこかに旅に出ていて親友の彼が私の保護者になっている

ちなみに彼の料理は反則並にうまくて

おまけに聞き上手

とても良い人なの

あ、今日は和食だ！ 焼き魚もある ラッキー！

やっぱりミルさんの作る料理はとっても美味しい！！

幸せに食べていた私にミルさんは嬉しそうに笑って今日は休日だから出かけたらと聞かれた

この後新しい絵を描こうとしていた私はヤダといったけどミルさんは問答無用と無理やりばいっと私といつの間にも用意されていたかばんを外に捨てた・・・ちょっとひどくない！？

そこでふと絵の具が足りない事に気づいた

あー！！！！ やばいよ、今日完成した作品で100本以上の絵の

具の数がなくなっちゃたよー！！

予想以上に色の種類を使いすぎたんだよねー（普通100本以上の絵の具を使わないから！？）

で！ 急いで専門店にダッシュしてました ははは

ちょうどよかったー！ さっきからあの変な感覚の事もあるからね

「ありがとございました」

そしてその専門店からでた私はホクホクとした顔で大量になくした色の絵の具と新作色の絵の具と質が良くて安いキャンバスの入った袋を一生懸命両手で運んだ

大量の荷物なので足は頼りなくヨロヨロ フラフラと歩いて家のほうへと帰っていたまでは良かったんだけど・・・

ドンッ

あ、誰かにぶつかった

でもその大量の荷物は絵の具とそんなに高くないキャンバスだけで痛くないと思うけど謝ろう

「すみません、だいじょう・・・」

とペコリとお辞儀をして顔を上げたら

リーゼントで顔が何処か老けていて厳つい

服はどこかの三流映画に出そうなチンピラ！　　って感じの服を着ていた

・ ・ ・ わあ、この人色の組み合わせちゃんと出来ていないから結構ダサく見える

そう頭の隅で考えていたらピクピクと繭を動かし勢いよく怒鳴つてきた

「ア、ア！ テメエ、腕が折れちまつたじゃねえかあ！？」

「すすすすみません!!!!!!」

え え え え え え え え え え え え え え え ! ! ! ! !

!!!

ちよ！ ま！ ええええええ！！

言葉が出ない！

なにこの男の人！？

古！ 古いよこのセリフ！！ リーゼントより古い！

もつという展開になるか明らかじゃない！

「この後「金出せや!!」とかいったら完全に……」

「まあ、取り合えず金出せや！！それで勘弁してやる」

い、いっちゃったよー！！

もうどうしようー！！ もう完璧に古い手口のカツアゲでしょー！？

もうちょっと現代風に言ってもいいじゃないの！？

というより実は不良初心者ってことかな・・・

いやいやそれは絶対にないから

って何考えているの私！？

私は混乱して、目の前にいる人に恐怖を感じながらどうやって逃げるかと考えていた

その間私の周りにいる人達は冷めた目で見たり、無関心に通り過ぎたり、やゝねえカツアゲよとかいたり誰一人と助けよとはしない

だってこの世界の人達は悲しいほど色あせている

ウソの色で塗られた平和な世界の人達だから

『私がこの異世界を塗りなおしたらこの世界の住民は変わるかな？』

あれ？ 何でこの言葉が浮かんだの？

そう思っていたら目の前の男の人は私がオロオロと混乱しているだけな私をみて痺れを切らしたのか私の腕を無理やり引っ張り人気の少ない所へと連れて行かれる

「な、何するんですか!？」

その行動に私の体は危機反応の信号になる

その男の人は無理や引っ張った腕をさらに強く握った

「何って？ こうなったら体で覚えてもらわないといけねえな!！」

とその人は言って空いている拳を握り振り上げて・・・殴ろうとした

もうダメだ!!

私は数秒後に来る痛みに目を瞑った

ドカ!!!

「うるせーぞ」

「ぶ\$&#%\$!!--!!」

ガラン!!

ガラガラ

ラ!!!

ゴロコロオロコロッゴロ!!!

スタッ

でも来るはずの痛みはなかった

その代わりに誰かの声ともものすごい音と軽い音が聞こえた

恐る恐る目を開けると・・・

目の前にいるのは影の部分真っ黒、光がある所には真っ白な髪の毛が見えた

まるで今日の朝まで見ていたあの少年の髪のように

その髪をみて混乱していた頭を無理やり冷静にさせて周りを見る

不思議な髪の人に向こうにはさっきまで私をカツアゲしようとした男の人が大きなたんこぶと間抜けで無残な姿で転がっていた

何が起こったの？

冷静になったけど少し現実逃避している

目の前にいる不思議な髪をしている後姿の人はもしかして助けてくれたのかな？

もし本当ならこの『世界』で一番珍しいタイプの人だよ

でもいくらなんでも思いつきり飛び蹴りしなくていいと思う（だつてピクピクして怖い．．．やられた人が）

「なあ．．．」

いろんな事を考えていたらその人が声を出した

さっき「うるせーぞ」といった人の声と同じだ

「じいつさあ．．．」

とゆっくりゆっくりと言葉を口していた

まるで重要なことをいうな口ぶり

その後姿がかつこよく見えるので私は少女マンガ風にドキドキと胸が高鳴って頬が自然と赤くなつてゆく

次の言葉は何が出るのだろつと思っていたら

その人はこっちに向いて

形のいい唇を動かし言った

「．．．誰さあ？」

「状況分からず何であの人蹴ったんかい!？」

思わず突っ込んでしまった私は悪くない

だってボケたようなめんどくさそうな顔でいったんだよ？

格好いいと思った私がバカだった!!

ていうがさつきドキドキしてたのを返して!!

と心の中で叫んでいたら

ギユウウウウウグルルルウルン♪

「「・・・」」

シ

ン

何だろう、今の音・・・まさかコレ、お腹の音じゃないよね!

まるで猛獣が楽しそうに唸っているだと思おう!　ってそれもそれでダメじゃん!

「やべー、腹へった」

て本当にお腹の音！？

ありえないようう

そう考えていたら、ポムつと私の肩に誰かが手を置いた

私はあんな音を聞いて現実逃避のために下を向いていた顔を思いつきりあげたら

さっきまで10m先までいたあの不思議な髪の人顔が見えた

「はわ！」

私はびつくりしたけどその人はお構いなしに顔を近づいた

それでさらにパニックになった

だって男の人の顔が近いんだよ！

しかも私はあんまり男の人と喋らないし・・・

パニックにならない人は多分、男慣れしている人が何もかも無関心の人達だけだよ

わわわ、な、なに言われるんだろう

「あんさん、メシ食わせてくれん？ 見てのとおりワーは腹へってさー、どうかお願いする」

モノスゴイ喋り方をしてた

まるでいろんな人の話し方が一つになった感じ？

．．．なんか、面倒くさい人に出会っちゃった気がしちゃうんだけど
かわりたくないなーと想っていてもこの人、私の腕をとってグイ
グイ↓っと人通りが多い所につれられた

インパクトが強すぎた私は彼に連れられてそこから離れた

だから分からなかったかもしれない．．．

その場に残って存在を忘れた吹っ飛ばされたダサイ男が大きなゆが
みを起こすとは誰も想わなかった

私の腕をつかんでいるこいつ以外はね。

異世界管理人 壱（後書き）

多分最新が一ヶ月に一回ぐらいになりそうです。
どうか暖かい目でみてください！

と出会った 弐（前書き）

意外と予想に早くできました
そして長い！ です
楽しんでください

と出会った 式

人通りがある所に来て私も私は目の前の彼に腕を引つ張られたまんま

あー！！ 私の大事な物達^{えのぐ}が落ちそう！？

と思ったらゴチーンっという音と共に顔に衝撃が走った

「いったー！」

なにこの痛さ！？ まるで思いつきり壁にぶつかった感覚があるんだけど！！

前を見ると闇のように濃いがでもどこか安心できるような黒色が視界いっぱい映った

これって・・・この男の人の服？

「忘れとた。最初はお主のその荷物どうにかしねえとな、ジャマやねしね。どこかに荷をおく所に行くとするかのう」

またごちゃ混ぜな喋り方をしていつの間にかに私の荷物を持って

消えた・・・

「ちょっとー！！！！ 私の絵の具・・・とキャンバースー！！！！」

あゝあゝ

この為にだけに必死に貯めていたお金・・・そのお陰で最高の色に出会ったのに

そんな手品みたいに消えてしまったなんて

涙が
・
・
・

[illegible]

出るワケない！！

むしろこの目の前の人を殴り飛ばしたいわ！！！！

あーもう何でこんな事したんだ！

私のお小遣いパーだよパー！！！！

私が手をグーを作ろうとした時

「なーにゆちよる？　僕はただ^{やつがれ}テメーの荷物をもっておるだけじゃ」

心外だなとした感じで彼はガサゴソとポケットに突っ込んで出してそれを私に投げた

！？

何！？いきなりっと思いつながら私は中身を見た

そこにはミニサイズになっている私が買って目の前に人に消されたと思った絵の具達だった

あ、そういえばキャンバスも買ったんだった

よ、よかったー！　てっきりこの世に葬られていたのかと思ってたら

ただポーチミたいな袋の中に小さくなってただけなのね

．．．はい？

「何で私の荷物が小さくなっているの!? どうやってこんなミニサイズに小さくしちゃったの!?」

「なんだい? この方が楽で手っ取り早くてよいであろう。ケチケチしないでもいいじゃんかい」

いや、理由を聞いていません!

なんでこんな事しちゃったのあんた

いや、首傾げないで!

いーじゃん見たいな目で見ないで!

何かと戦っているとどつかのお店に着いた

カラン♪

あれ? 良く聞くドアに開ける鐘の音がした気がする

「『Lugar en el Mundo』へようこそ!
あれ? シキちゃん?」

「え!? ミルさん!?」

もしかしてここミルさんのお店?

あ、さっきお店経営しているっていったよね?

ミルさんのお料理は学生の財布に優しいのにそこら辺の飲食店の味

よりも美味しくて（さつきも言ったかも？）

彼自身も優しくて心遣いもできていていろんなお話や相談も乗ってくれるのでとても人気のの

ただ場所が悪くて迷いやすいのが短所

でも超人気だからここに来る人は多い

そのせいで一日五十人以上の人がこの近くに迷子になっているらしい

こわ！

「何現実逃避しているでい？ 店主、できたら魚料理のメニューくださーい！」

「シキちゃん！ 男が苦手って言うていたけど・・・早くいいなさい、お祝いしてあげたのに。はい、魚料理全部ですね。時間が掛かるから待つてくださいね」

「ミルさん、誤解です！！！！ この人はカツアゲから助けてくれたの！！」

そう突っ込んだらミルさんは少し残念そうにしてお冷を出して厨房にいつちやった

何か作るのかな？ でも何で残念そうにしていたのかすごく気になるんだけど・・・ま、いつか

私達は席に着いた

無言のままだと気まずい．．．いや実際に気まずいんだけど

どうしようかな？

「おー、自己紹介忘れておったわい。俺はレオパルド、某を知っているモノは『レオ』と呼ばれているんだ！」

以外が以外！ この人、いやレオパルドさん？ から自己紹介するなんて．．．

じゃあ、私も言わないとね

「私はシキ。言い忘れていたけど、カツアゲから助けてくれてありがとうレオパルドさん」

「ん、お主に何かしたか？」

「．．．分からなかったらいいわ。」

確かに私には何もしていないんだけどやっぱ一応お礼はあったからいいよね

ふしぎそうな顔をしたレオは冷たいお冷を一气飲みして

コップに残った氷をがりがりと食べ始めた

氷の中にはミルさんが育てたミントの葉があるんだけど

それも気にせずに食べた

つ、冷たくない？

いやなんか普通に食べているようにけど

ガリ！　ゴリリッ！！　とか聞こえるんだけど・・・

間違えて骨とか食べていないよね？

とか考えてしまいがちかも　コク　コク　と自分にも出されたミン
トの氷付きのお冷をゆっくり飲んだ

わぁ、ミントで　すー　と喉が冷たくなって気持ちいい

そういえば今日は暑いって天気予報が言っていたような・・・

だからミント付きの氷で涼しんで楽しんでもらおうなんて

やっぱりミルさんすごいなあっと思っていたらレオパルドさんが氷を
食べつくし終わったのかまた話かけてきた

「ふむ、この店の主は心の氣遣いがちゃんとにしてある。おめーさ
んはよくここにくるのかい？」

私は何か話してみたかったから答えた

「ここに来るっていうより私ミルさんと住んでいてね、よくここに
食べに来たり手伝ったりしているんだ！　この前、手伝った時は超
可愛いデコレーションのショートケーキをくれたし」

とっても美味しかったなあというと

レオパルドさんの口から滝が出るほどのよだれが出ていた

ぎゃー！　ここでよだれたらすな！　床がよごれるって！

「ズリーぜよ！　ボクも食べたい！　そーそーするーだけーでおいーしーそーそー！」

「いや、アンタここに来たの初めてでしょ！？　なんで常連客みたいな反応するの！？」

そついうと

えーこの常連になるんだからいいのでは？　っていうかならんからな！

と答えてくれた

．．．ミルさんの料理はたしかに美味しいよ

あるお客さんが@%\$#%円だしてその分の料理一人で食べて食べまくっておなか壊して病院送りになってしまった位凄くおいしいよ？

美味しいけど食べていないのになんでそんな反応でそんなにたべたいの？

そう疑問に感じてたらレオパルドは自分の鼻を　チヨン　ちよんと自分の鼻を指した

鼻がいいんだよ！　らしいって鼻がよくても意味分らないわよ！！

え？　なにそのマジで何言ってるの的な視線

今、料理している匂いでわかるだろ普通・・・

いやにおいだけで全部分るアンタスゴいわ！？！？！

というかなチュラルに考えている事呼んだよね！？

と突っ込んだりしたら

レオパルドさんがいきなり話題を変えた

「ずっとーおもとうてしまってたが、この店・・・色の組み合わせが
明るいのに落ち着くねえ」

「そ、そうかな？」

このお店はレオパルドさんの言うとおり

派手な色を使っているはずなのに何処か落ち着くふいんきを持っているの

だってこの店の色の組み合わせをしたのが

「もしかして・・・あんさんが？」

「うん！　ミルさんの性格は優しくて心遣いな人だけど大人しい色
だと目立たないから、明るい色や派手な色を使いつつ落ち着くふい

んきをだしているように色をつけたんだ！」

とそこから私はどんどん色の話をしてきた

「私はいろが大好きなの！ たとえば、赤色は情熱の色ともいわれてほど派手な色なんだけどちょっと暗くしただけで落ち着いて渋くて大人な色になる。青色は逆に落ち着いた色だけど組み合わせや少し明るくすると面白い色や地味なのが派手になる！ 緑は濃いと落ち着けて安らぎを与えてくれる、もし明るくなったらとっても楽しそうな色に大変身！ 黄色は派手、その中に元気がもらえるような気分にする色は意外とふしぎだよね！ 橙色は黄色と赤色と混ぜた色で太陽と思わせるカッとした色で太陽というのが一番似合う、でも組み合わせによつて暗い印象を与えるの！ 桜色はかわいらしい印象が多いよね、だけど以外は綺麗なものが多いし、かつこよくなる時もある！ 後ね、後ね、結構面白いのある・・・」

そこで私はマシンガントークをしてしまったと気づいた

色の事についての話なら三日で話せるほど私は色が好きだから

ついマシンガントークしてしまうの・・・

どうしよう（汗）・・・

ただでさえ友達にも引かれているのに初対面でいきなり意味分からないことベラベラと話しされて嫌だよね

とつい自分の顔を下に向けてしまう

そしてマイナスな事ばかり考えてしまった

あゝ、どうしよう恩人なのに嫌な思いさせちゃった・・・

もし、引かれたらどうしよう・・・

そんな中レオパルドさんは私の頭をぼふぼふとなでてくれて

「きょーみぶけー話じゃけん。以外と話はしっくりんとくんのので、もつと話し見てちょうでいのえ」

そういわれて不思議と気落ちしていたものがスッポリとなくなった

気持ちが軽くなってきたときにレオパルドさんは私にニカツつと明るい笑顔をもつと何か話してゝつと言ってきたので

とりあえず色のお話をさつきよりはやい調子で話し始めた

この色と色の組み合わせは可愛いとか面白いとかそういうことを話して夢中になっていると自然と時間がたっていた

そろそろミルさんのご飯来るかな？ と想っていたナイスタイミングにミルさんは両手いっぱい綺麗な盛り付けられた料理を運んできた

でも運んでいる量が半端ないよ

四回も厨房を行ったり来たりの繰り返ししているぐらいすごい量なのよ

「レオパルド君でいいかな？　これが注文の物ができたよ」

「当たっているであろう。　　っつあ、メチャクチャうみやそ〜!!」
とレオパルドさんの目がキラキラとスポットライトに当てられた宝石のように輝いた

ミルさんは彼の表情を見て楽しいという感情とうれしい感情が混ざった表情を顔にでて皿にちよつとした時間で作ったとは思えないくらい綺麗に丁寧に盛り付けられた料理の説明をしまめた

そのままガツツキそうな感じだったけどそれを何とか抑えている（ように見える）レオパルドさんはミルさんの説明を聞いている

私はその二人を眺めていた

二人はお互いわいわいと話したり、じゃれ合っていた

・・・この人たち本当に今日が初対面だね

メチャクチャ仲がいいんですけど!?

とそう思っていたらミルさんの説明が終わったのか

右手に四本の食食用ナイフ

左手に四本のフォーク

をもって

「いたらいめす・・・あ、まちごうた。いたらいます」

ガリ！

バク バク バク バク バク バク

ガシャガシャ

ムシャ ムシャムシャ ムシャ ムシャ

ゴリ！ ガリ！ ゴrrrrrrr！！！！

ガチャガチャガチャガ

チャ

．．私は幻影を見ているのかな？

レオパルドさんが（多分）いただきますと言ったとたんに

両手に持っているナイフとフォークをいっぱい持っているのに何故か器用に使って爪に見えて

目が冷めているような冷静さがあるのにギランギランと鋭い視線

ニツコリ、じゃなくニヤリとした口から見える犬歯が光って

勢いよく目の前のごちそーに飛び出て

さっきの激しい音が聞こえる

なんか豹が獲物を追っかけて食べている姿が見えるんですけど（汗）

啞然としている私にミルさんは優しく微笑んで言ってくれてた

「彼、本当にここ数時間食わず飲まず状態だったみたいであんなおいしそうなご飯見るの久しぶりだったっていつていたんだ」

へ、へえ数時間であんな風になるんだ

成長期・・・とこの人に当てはまるのか分からないけどの男の人は大食いって本当なんだ

ちよつと勉強になった感じがする

そしてミルさんは関心している私の目の前に“あるもの”を置いてニツコリ笑ってまた厨房に入った

私はよく試食とかしているから今日は何かなっと思っていて“あるもの”を見た

こゝこれは!?

ドドドーーーーン!!!!!!!!!!(彼女の心境です)

もきれいに色付けされ美しく飾れてそれにふさわしい香りがふわりと鼻を刺激するこのすばらしいものは!!

私でもめったに食べられないミルさん特製幻のフルーツタルト!!!!

ジュルリ

このデザート私が提案したものでただのフルーツタルトじゃないから

作り方は結構複雑な上材料が特殊らしいので二、三ヶ月に一回しか出ないのこのデザート

それで私は幻っていつている

その幻のデザートを見た私はキラーンと目を輝き

フォークを片手に食べ始めた

もきゅ もきゅ

!!!!!!

おいしい!!!!!!

本当に美味しすぎてついついペースが速くなってしまい気がついた
らもう終わっていた

満足になった私はレオパルドさんに話しかけようとした

けどそんな必死に食べている彼に何となく話しかけづらい

でも食べている途中話するのはマナー違反なので止めた

私まで食べちゃいそうな勢いだっただから止めたのもあるんだけどね
(ここが本音だと言えない)

レオパルドさんがそうしている間に観察してみた

ここにくる途中は目立たなかったけどさっきも言ったとおり影は真つ黒の不思議な白い髪の毛に髪型も独特で前髪の左部分から耳が長い（どんな仕組みなのか聞いてみたい、ってどうしてあんな髪型に？）

吸い込まれるようで吐き出されるような感じがする意思の強そうだなにも悟られないツリ目な翠色の瞳（今は猛獣のような目でミルさんの料理を獲物のように見つめているんだけど）

鼻は高く筋が通って嗅覚が強そう（あ、鼻ピクピクした）

氷を運んでいる口は大きくそこから除く白い歯はどれでも噛み砕きそう（さっきから普通に骨付きの魚をやわらかいお菓子のようになっている、しかも音がスゴイ）

服もまた変なんだよね

黒のトータルネックのセーター、銀色の十字架形のネックレス、コート部分にまきついていてベルトと黒がベースで線が明るめの緑の線、そこからワザとスタスタにされているズボンとちょっとこついでどスマートに見える格好いい黒色のブーツはいいとして・・・

その黒色のセーターから着ている白いセミロングコートが左上の半分の部分がない

コップを持っている手はセーターとつながっているのか黒い手袋の上に中指と半分の手の甲には白い皮手袋に覆われている

チェーンみたいにベルト部分を通す所から前の部分と後ろの部分に黒白黒の順に巻きついていてヒョウ柄のベルトみたいなものを腰に

飾っている

あれ？ この人、夢に出ていた人？

でも黒猫ちゃんがない．．．

観察から思考に集中していたら何か視線感じた

じう

うん

今お客さんは私達しかいないから誰からの視線なのか分かる

「あ、あのう何でしょうか？ レオパルドさん」

「いやあねえ．．．我輩貴様とは初対面のはずなのだが、ぜってー見たことあるんだよなーとおもうんだよ俺様は」

となんか話し始めた．．．私が観察していたのをばれなくてよかった

いつもどおりに異世界の管理しに行こうと思って

準備するために異世界の狭間にいったらごちゃごちゃな色が見つけた

白 青 桜

茶 緑 藍

黒 赤 金

紫 灰 銀

それ以上の色が目の前にいた

そこに触れようとしても触れられないでも何か見えた

そこにいたのが・・・

「私？」

「しょーしょー！ その周りについている色が喜んでいるみたいに存在感が増している系。その後、つぱとそれらが消えたーっと思ったら・・・あゝら、不思議！ 夢だったんですYO」

と言いながらも食べ続ける

へへ、私も今朝の夢の話をしたら

レオパルドさんはキラッと目を光らせた

「じゃあ・・・運命じゃん！ ですてにーってやつえすね。こうなったら一緒に異世界管理の旅しようであろうではないか！」

?????

何かさっきから変な単語が聞こえる

『異世界』 『管理』

この二つの単語が彼の口からでた

あれ？ でももつと変なものもあつたはずなのに

ですてにーっとか運命とか・・・って意味同じ

何でこの単語が気になるの？

私のはてなマークを出して考え始めているたら

レオパルドさんはゴクリっつと最後の一口を食べ終えてどうした？
って尋ねた

私は恐る恐る気になっていることを聞いてみた

「さつきから『異世界』と『管理』という言葉が出ているんだけど、
どういう意味なんですか？」

するとレオパルドさんは一瞬私の目を見た

本当に誰も気がつかないぐらい一瞬

でも目を見られた私には分かって彼の眼が必然的に見える

その目には何かを探っているような目で何処か鋭い視線だった

そして彼は口を開き言葉を出そうとした時

ゾワッ

ビクッ

な、何これ！？

変な気持ち悪い冷たさをしたモノが私の背中に感じた

ヒュッ

カタカタカタカタカタカタカタ

ヒューッ

ヒューッ

ヒューッ

呼吸の仕方を忘れかけ全身が震え始めた

や、やだ何この感覚

世界が

色が

全てが

自分の体が崩されて無くなる感覚がシテクル

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い

この二つの感情に縛られて呼吸ができない、震えが止まらない

意識がくらくらしてきてもう本当に駄目、死にたくなる

怖いし気持ち悪いしどうにか成ってしまいそうに・・・

「吞まれるな」

その言葉で意識が目の前に向けた

誰？

吸い込まれるようで吐き出されるような不思議な緑色の瞳が私を安心させてくれた

「カハツ、ヒュツ……………スウー　ハア、スウー　ハア、スー　ハア」

私は呼吸を取り戻していて震えは何時の間にかに切れていた

そして落ち着いてきて来たら安心させた人、レオパルドさんが頭を撫でてた

彼は落ち着いた私をじっくり見てニコリを笑った

その笑顔は本当に安心させてくれて何かがカチリと片割れがくっ付いたような感覚がした

私はソレに答えるように大丈夫だよ？と安心させるように笑った

レオパルドさんは一瞬ビックリした顔をして少し思案顔になった

「……………吞まれそうだったから『異世界管理人』の関係者、あるいは管理人になれる素質があるって事か？」

と彼がぼそりと混ざった口調じゃない言葉を咳いていたのは聞こえなかったが私は何で狂いそうになったのを疑問に思った

するとレオパルドさんはお金を出してた

何時の間にかに食べ終わってた

す、スゴイ・・・（汗）

私は外に出ると思って外に出ないほうが良いと言った

だってあんな嫌な感じをして外でたら危ない目に合う気がする

彼はそんな私を見て行き成りこう訊ねた

「お前、覚悟がある？」

一瞬何の冗談？ と思った

でもレオパルドさんは真剣な顔をしてた

私はつい何の？ と聞き返してしまった

すると彼はてをこちらに差し伸べて

「俺と一緒に来る覚悟」

と答えた

言葉が少なすぎてどういう事ですか！？ と答えたのが普段の私でしょう

でも今朝起こったあの不思議な感覚が今して足りなかったものはまったく感覚して無意識に手を取った

レオパルドさんは・・・レオはニヤリと先程とは違う笑い方をして私の手を引く張り店を出て走り出した。

と出会った 弐（後書き）

できたら感想ください！

次回も多分遅めに最新してくると思いますのでのんびり待ってください

不思議な画家の少女 参

タッタッタッタッタッタッタッタ

タッタッタッタッタッタッタッタ

軽い音とその音に遅れて小さめの音が暗くて誰もいない路地に響いていた

その音は最初のほうの足音はレオので後の音は私の足音

あれから私たちは走りっぱなし

何かさっきの言葉で納得しちゃってレオの手をとってしまった

疑問も消えないしまた増える

おまけにこんなふうに引っぱられるような似た状況

さっきもあつた気がする

そんな事を考えても時間がすぎて

足音二つが耳に残って

それ以外の音はなくてなんかさびしくて何故か怖かった

怖いのはあの吞まれるような感覚がまだこの体に残っていた

でも彼の手から洗礼されるようにその感覚が消えていく

でもまだ怖かったからレオに話かけた

というより疑問を言った

「何で、私にあんな事を？ それにさっきの疑問にも答えてない」

声は若干残っていた感覚の所為で震えていた

レオはちらつとこちらを向いてまた前に戻した

その行動に私は何がしたいんだろうとまた疑問が一つふえた

でも言ったらとたんにそのいやな感覚は消えて変わりに二つの感覚が生まれた

いや、あのいやな感覚^{やっ}が消えたお陰で感覚が戻ったというほうがしっくり来る

居るレオの気配が桜の花弁が舞うようなひらひらと散るようにはらはらと現れたり消えたりして

目の前に居る彼が本当に居るのか分からない

それなのに別の感覚は不安定な気配がするのにレオの気配がはっきりと分かる

まるで私自身の気配のような感覚で・・・

でも心地いいどころか不思議と安心する感覚だ

その感覚に戸惑っているはずなのに・・・

と思っていたらイキナリレオがしゃべった

「疑問に答える、シキ」

「え？」

イキナリ喋ったからびっくりして彼を見た

そんな彼は私の目を見てしばらくたって前に進んで話し始めた

その声は真剣そのものだった

「世界の始まりはビック・バンとか熱とか水とか色々仮説が出てきているが、実際の『異世界』達が生まれてくるのは『世界』と『色』が合わさって異世界が生まれるや

その異世界は産れたのはいい・・・でも異世界は自分だけでは保てない

ほっとくと自滅

まあ、簡単にいうとドカーン！ とこの世がなくなっただけはい、おしまい！ 的な感じ〜

理由は今の所調べているが未だ不明、だがそれをとめる方法があ

るんですよ

それは『異世界』にある中心、心臓ともいえるモノ『メモリア』を見つけて異世界を『管理』する事によって異世界が自滅しないようにする事だにゃ〜

その異世界を管理するのが『異世界管理人』と呼ばれるモノ！

人でも鬼でも動物でも可能なんす！

でもでもだれでも出来るってわけないよな〜

だって異世界そのものを崩壊させないようにしないといけない上に色々な条件や力を持っていねーとムイリムリ！

たとえば異世界の中心部分がおかしいと感じいたり、さっき見たいに震えたり吐き気がしてたりとか？

で、今どこのだれか奴なのかがこの異世界の超大事な物を手に入れようとしちゃってるのよ？

面白くない？ わらっちゃうー

あ、ちなみに小生が見本の異世界管理人でい〜

うん、つまり簡単に生理すると

一つ目は今この異世界、私の目に見える世界が危ない

二つ目はレオは異世界を管理する『異世界管理人』というモノで

三つ目は異世界管理人になるのは結構むずい

ほへー、結構シンプルだね

もつとごちゃごちゃしていて耳が痛くなって頭がグラングランと
なる所だった

異世界を管理するなんて聞いたことないし

あ、そういえば異世界が今危ないって笑えるね

．．．．．

「それ、笑い話になんないよ！！！！ とくに私が住んでいる世界が
危ないってどついう事！？」

「はっは、言葉どーりでござる」

あつてない！ 笑い方としゃべり方が全然あつてない！

そして笑うな！！！！

そう大声でツツコムと息が切れ始めた

皆さんお忘れでしょうが．．．私たちが店から出てからずーーーーー
ーーーーと走っているんだよ

走っている距離なんてもう結構あってその中で会話、突っ込み、叫びとやってみて

絶対に息切れるから

と思いながらも走る

レオをみるとコイツはととても涼しそうな顔をしている

しかも汗一滴も流れるどころがにじんでもない

この人どんな体力しているわけ！？

いったん休憩にしようと頼もうとしたらにーっとかわいらしい動物の鳴声が聞こえた

それと同時にレオの動きも止まった

彼女は泊まったことによって今の内と思い呼吸を直した

すー はー すー はー

し、死ぬかと思った！！！！

どっかの猫ちゃんありがとう！

もし鳴かなかつたらたぶん私は引きずられていたと思う

と感謝していたらレオは私の手を離して両手をあげた

何をしているの？と聞く前に答えが舞い降りた

「むみ〜〜〜！！！！」

と可愛い鳴き声と共にレオの上から小さな黒猫ちゃんがスポっとはまった

いやぁ本当にスポっとはまった・・・まるで筒にはまるのにちょうどいい物がはまった音がした

なんでそういう音になったんだろう？

・・・そんなことより黒猫ちゃんがかわいいい！！！！！！

ちよつとなんか斑点模様が見えて猫なのに微妙にたれ目

そこが可愛い！

あぶない状況にいるはずなのにその猫ちゃんは私にとって今は癒しだ
さっきまでカツアゲされそうでそこから走って今異世界が危ない状況にいるって知ったばかりの私には十分の癒し・・・

おもいつきり黒猫ちゃんに癒されながら（あ、今み〜って鳴いた可愛い！！）見ていたらレオがその子猫ちゃんをずいっと目の前出して話した

「お〜、この黒ヒョウで我輩の相棒、ムンドさ。ムンド、このまえ言っていた夢のヤツのお嬢ちゃんのシキだ！」

とムンドは私の肩に飛び乗りくんと鼻をかいでいた

こ、このこ黒ヒヨウなんだ・・・でも可愛いからいいや♪

そーっと頭を撫でたら黒ヒヨウちゃん、ムンドは気持ちよさそうに
してもっともっととぐりぐりしてくる

癒し効果がでておもわず笑顔になる

となりにいるレオは感心している顔をして「ほう」と声を漏らして
笑っていた

私は何で笑っているのかは分からなかったけどそんなことはどうで
もよくてぐりぐりと撫でて撫でて！っていうムンドの動作に感動し
て思わずこの子を抱き上げてクルクルと踊りまわった

そこでありえない事が起きた

踊り回っていた私の足に地面につく感覚がしなかった

「・・・え？」

一瞬おちる感覚がしてあの嫌な感覚が襲ってきた

ゾクリと背中だけじゃなくて全身に着たのでなきそうになって目を
つぶった

でも落ちる瞬間は一瞬であの間隔がまた消えて誰かに支えられてい
る感覚がした

私は恐る恐る目を開ける

見えたのは気持ち悪い汚い色をしたゆがんだ空間が足元にあった

思わず上を見るとレオがとても近くに居た

どうやらレオがあのだ歪んだ空間に落ちる所前に支えて助けたようだ

私は少し脱力して力を抜いた

本当に怖かったから

レオはそんな私を支えなおしてあの歪んだ空間を蹴り、走り出した

その自然な動作に私は戸惑いミユミヤツとへんな声を出してしまった

「やばい、ムンド状況。中心部分見つかったかけん？」

レオはそういうとムンドは人の言葉を理解しているみたいで光始めた

ほ、本当に光っているよ今朝の夢のように・・・

ムンドの光をレオのクロス型の首飾りに吸い込んできた

なーーー！ その首飾りただのファッションじゃないのーーー！！！！

もう本当この人どんな人なのよ！？

もう本当になに？！

と混乱していたら

「シキ、余所見はいけんでー！ 今度は増えてくる上にでけーぞ！」
とレオがそういった瞬間、

あの空間がぐにゃぐにゃとあちこちに現れた

ゾワゾワ！！

とくるけどそこは何かして慣れないといけないと思った

レオはその歪んだ空間に向かって走った

「ちょっと、あの空間に飛び込むの！？ 私でもあの空間はやばいものって分るわ！ その空間に突っ込むなんて自殺に誓い行動だよ、今すぐ引き返して！！」

まっすぐその空間に行くもんだから驚き恐怖が襲った

あの空間に入ったら最後、自分の存在がクチャグチャになってしまい
いそうな気がした

でもレオは私の注意もきかない

むしろ彼のスピードが上がりそこに突っ込んだ

あー！！ もうだめ！？

私はそう思った

でも・・・何も起こらなかった

どういうこと？とおもって目を開けたら

そこには空間はなくて代わりに不自然に真っ白い壁と太陽の光に当てられているのに影のように真っ黒い床が見えた

へっ？

どうなっているの？

トン

軽い音がして周りを見渡すと

あちこち歪んでいた空間の変わりに修復されたような空間が広がった・・・

ただそこには色がなくて白と黒というものしかなかった

「ふう、今回は結構なことをしてくる。あのやつこさんは・・・」

「しょ、しょつと！？ 何で歪んだ空間があつた場所にめっちゃ不自然な色を残した壁とか床とかがあるの！？ しかも影がさしてあるのに白い壁とかありえないし！？」

「んにゃー？ ああ、この『力』か？ 某にも分らぬゆえ説明がねえんだよ、シキ」

と若干？みなながらも私の疑問をあつさり分らんと答えたレオ

ますますアンタの事分らなくなつて来たんだけど――！？！？！？

そんなツツコミを入れている間にレオは次々と増えてでかくなつてゆくゆがんだ空間を蹴ったり、空いた拳で振りかざして空間が修復されてゆく

しかも足音がさっきまでと違って激しい動きをしているはずなのに足音がまったくしない

まるで豹のような足音

いや一回もそんな音聞いた事ないけどどんな風にといわれたらそうとしか答えられない

私はそのまま大人しくしているとレオは次々攻撃してくる（？）歪んだ空間を修復してゆくのを見る

しかしなんだそのゆがんだ空間がなんかザコが紙のように吹っ飛ばされているように見えるね

と思つたら

ふらり

ふらり

ふらり

ふらり

ふらり

ふらり

ふらり

ふらり

ふらり

ナニかが現れた

ふらり

ふらり

ふらり

後ろからも現れた

影で見えない

でもなんでか知らないけど何なのか知っていた

「・・・レオ」

「はいな、新しいTIPPOの相手だな」

レオに声をかけると同じく分かっていたのかそう返事した

そして太陽の光に当てられた私達の前に出てきたのは

この路地の近くにいた汚染されたように体中に斑点模様が出来て

ところどころにさっきまでレオの手（ほとんど足？）によって修復

されたあのゆがんだ空間の色が

今、もやとなって出てきた人達だった

たぶんあの人達はあの歪んだ空間に知らずの内に触れてその空間の様な状態に成ってしまったんだろうね

とそこに男の人がきて状況を見た瞬間逃げようとした

でも敵はそれを許すはずもなく

男の人が逃げ走る前にさわり

その人は敵と同じように体に斑点でところどころにもやが出てきた

それを見た私は一瞬にして背中に寒気がした

レオは私に視線を向けた

私はすぐに気づいてその人達からレオに視線を向ける

彼の眼は「拙僧は大丈夫であるが、てめえはさわんじゃねえ」と語っていた

私は頷いた

だけどついでに「眼でも混ざった口調で伝わるのなんで?!」とかえした

レオはそれを無視^{スルー}してその人たちを避けてゆくように走る

その行動を起こすと分かっていたのかその人達は追いかけてきて来る表情は崩れていたり、不気味だったりするので私は若干涙目になるは当たり前

叫びたいけど叫んだらそれを聞いた誰かがこの路地に来てまたあの人達のようになると思い必死に我慢した

その間にレオは走って避けて走って避けて飛び跳ねるなどして前に進む

ちょっと疑問に思った事があって彼に聞いた

「ねえ、レオ。不思議に思うんだけどさっきみたいにあの人達を元に戻せないの?」

レオは首を横に振り説明し始めた

「あれね、『世界』しか直せないの。つ、ま、り!人間はなおせな!いいのである」

うつそー!?!? と叫びそうになった

そして運が悪かったのかレオが少し油断していたのかそれとも偶然なのか

後ろに顔が崩れてもやがある女の人が私達の背後に急接近して

私の体の一部、髪をつかんだ

「「！！！！」」

それを見た私は顔が真っ青になり

レオは何処からかナイフを取り出し私の髪を切って汚染から逃れようとした

が

「ギヤアアアアアアアアアアアッアアッアアア！！！！！！！！」

と女の日とは私の髪の毛を離し苦しそうに叫んだら光輝き

周りにも影響したのか同じく輝いた

輝いている間絶叫やら叫びなど聞こえた

そして光が止んだら

汚染されたはずの人が元通り

いや、色あせた色が生きているような色に変わった（気絶しているけど・・・）

それを見た私達は

「・・・ねえ、私なにかした？」

「さあのお、面白いモノでも持ってんじやんないのかネ？」

と行ってその場を去り前にすすんだ

気絶している人達には悪いけど本当に大変な事になっているからそのままにしておいた

わあ、どうしよう！？　これが終わったらあの人達の様子見に行かなきゃ

その人達が倒れているところを見てそう思っていた

静かになった道をまた走り続けて何分かってとてもとても広いところについた

その場所は私がすんでいる町と同じく色褪せて所々壊れていて寂しい空間が広がっていた

「ッチ。テメエラだったのか、俺が作った下僕を倒したのはあ！？」

突如現れた謎の声

あれれ、謎じゃなくてつい何時間前に聞いた事のある声

そう思ったら相手が現れた

ユラリと影から現れるのは少々、失礼めちゃくちや不気味です!!!!

きゃー!!!! 寒気がする!!!!

...

あれ？

あれれ？

あれれれ？

「...ねーねー、あの人可愛そう。」

「そうだけん、痛々しいすがたしてんなーとそう思うであろっ」

「あのブクッてしているあの頬」

「てめえが蹴ったのに覚えてねえのか!? その女も何できづかねえのかよ?!」

んん？ このダサイ男の人どっかであっただけ？

何処だっけ？ んー

あ、この人もしかして私にカツアゲしようとしてレオにとび蹴り食らったダサい人？

私あの時怖くて顔覚えてないんだよね

そう思っただけを見た

怖い顔をして彼の背中からあのいやな感覚がする空間が広がっていた

私はそれを見て思わず吐きそうになる

そして体が

カタカタカタカタカタカタカタ
と震え始める

でも私は少しずつなれてきてすこしの間だけ震えた

それでも震えてしまっただけ

レオは何かムンドと話していた

「ムンド、アイツがもっているんのかい？」

ムンドはその質問に指定するかのよう「ミーン」と一回鳴いた

彼はその指定を聞いてさっきまでしていたニヤリとした表情が消えた

代わりに無表情に誓い真剣な顔に変わった

まるでえものを真剣にしとめようとしている獣の眼まなこ

彼の眼はぞくりとまた違う感覚に襲われる

彼のふいんきが変だと勘づいた男の人はテメエっとか言っつて何処からなのか汚染された人達がブアツと現れ

彼の攻撃するようにこの人達と同じように汚染されるように命令した

「歓迎してやれえ、ヤロウ共!!!」

レオは私とムンドを安全な場所に下ろし

自分はそのラスボス的な存在になった男の人の前に突っ込んだ

その前に男の人の前には汚染された人達が沢山居て彼をかばうようにしていた

レオは見事な身軽さでかわしたり

細い体なのに力強い足と拳で殴ったり、蹴って

時には計算しているように重力を利用して相手を倒したりしている

本当にこの人の心配をしても良いのか分らないくらい強い

まるで私をだっこしていた事が判でだったような気がする

「ムンド・・・あなたのご主人すごいわ」

ボソツというとムンドは「ムニ！」と元気よく返事した

バツバタ倒していくのをみると私はあることに気づいた

倒れていく汚染された人達は横一列並んでいてまるで治療されるような感じのふいんきだ

私はレオを見た

彼は私の事に気づいて指定するように小さく首を縦に振った

それで私は取りあえず手を眼の前にいる汚染された人の体の一部を触った

するとふわりと汚染された部分は消え

代わりに色が輝き出し存在感があふれた

どうやら私の手はスゴイみたい

と思いまた告ぎの人へと触り始めた

次も成功してまた別の人へといく

それを繰り返しているうち私は自分の体が重くなるのを感じた

すこしつらい・・・でもレオほどじゃないと思い頑張る

一方レオは全て汚染された人達を気絶させた事に成功したがスタミ

ナが少し無くなってしまったようだ

すこし息が乱れているのが見えるのがその証拠

男の人は余裕そうな顔をしていた

そして

沢山の歪んだ空間を作って私達がいる所に行かせた

私は全ての人たちを汚染から解放する為に意味の分らない力を使って動けなくて

しかも私の周りはムンドだけじゃなく他の汚染されていた人達が寝ていた

私はその歪んだ空間がどうしてここに来るのか分った

戦いはいつも弱者を狙う

それが分って腰の力が抜けてぺたんつと座った

レオはそれを許さず私達を守るように空間を次々と修復してゆく

でも守りながら修復するのは大変なのか少しずつ確実に傷ができて
いる

私は彼が今日が初対面なのに彼が傷つけられるのが心が痛くなる

だから私は思いつき男の人に叫んだ

「あなた何処からこんな力を手に入れて何をしようとしているの？」

男の人は空間を作らせながら答えた

「この力はテメエら二人が去った後に俺の目の前にぎらつく光を触つたらこの空間をつくり、人間を従わせる力を持ったんだよ！！．．．
．．．そういえば何をしようかって？ 勿論、この世界を俺が支配してやる！！！！ この空間で人々を俺の下僕としてしたがってなあ！！！！」

ひどい

ひどすぎる！！！！

こんな事間違っている

「こんな事をしようとしてみんなが幸せにはなれない！！！！ 貴方がこの世界を支配しようとししないで！！！！」

私は思った事を叫んだ

でも男の人は私の叫びが戯言だと思い

狂うように笑った

いいえ、もう狂っていたんでしょう

だってその男の人の体から勝手に空間が生み出されている

暴走したんだと思う

「ふはははは！……！！ テメエの叫びなんで知らねえなあ……！！
今日から俺はこの『世界』の王だあ！……！！」

その言葉をいった瞬間

レオの時が

止

ま

っ

た

私から見ても彼全ての動きが、神経が、細胞が、思考が 止まった
と分った

ふ

は

ハ

ハハハ

ッ

ハハハハ

は

ハハ

ハハ

ハハハ

ハ

は

ハ

狂った笑い声はこの空間に響く

男の人は多分今レオの身に起こっているのがわからない

数秒間、レオはその状態になっていた

周りにはあのいやな空間に囲まれているのに

そしてチャンスだと思っていたのがその空間が一気に襲い掛かった

その空間に飲み込まれる寸前の時

レオはそこで初めて全ての体、細胞、思考が動き

鋭い目で私を見た

私はその目をみて小さく頷いた

そして空間はレオを飲み込みぐチャ　ゴチャと気持ち悪い音を出していた

その音はまるで獲物を取り合って食べているような音だった

それを見た男の人はトドメをさしたのかと思いニヤリと勝利に浸っていた

でも私からみては・・・ここから十二かがくと思った

再び狂った男の人の笑い声が響く

でも私には今度は哀れな負け犬の遠吠えにしか聞こえなかった

「ほうほう、『世界』の王？　そんな者になる気ですかい、貴様は

？」

静かで低い声が笑い声よりこの場所に響いた

ほーら、来た

私は本当に初対面なはずなのに彼の性格なかみを分っていた

男の人は彼が生きているとは思わずその場所に居たい空間をどかした

そこにあつたのは何もない白と黒の床しかなかった

「『世界』の王なんてなるなんてできないんでい。でもそんな王はないけどさあー、『異世界』を管理するモノがあるんだよ？ 知ってた知ってた？」

さっきまで喋らなかったレオはあんな普通じゃない状態からなんてあつたけ？ と思わずように沢山喋った

ここはただの路地

隠れている場所は限られている

男の人は一生懸命レオを探す

ハエが飛んでいるゴミ置き場にもいない

壁の隅にもいない

フェンスの向こうもない

さあ、どこだろう？

どこに隠れているの？

と問いたくなるほどの気配のなさカモフラージュと隠れ方

でも私には分る

レオが、レオパルドがどこに隠れているのかどこに居るのか

とっても簡単な所に隠れている

男の人は隠れ方に違和感、恐怖を持ってしまった

焦って焦りまくって冷や汗？ 脂汗？ をたらし探す

「デメエ！！！ どこに隠れてやがる！？」

もう声が震えている

可愛そうに

可愛そうだから教えよう

こんなにも簡単な所に隠れているのに

「どこにかくれているのかしりたい
？」

ゆっくり、ゆっくりと私は男の人に聞く

そばに居たムンドは私の膝に乗り「にゃー」と鳴いた

ムンドが鳴いただけなのにビクッと肩を震わせた

私はムンドの背中をゆっくり撫でた

ムンドは気持ちよさそうにしていた

男の人はじれったいのか早く教えてくれと叫んだ

私はゆっくりゆっくり答えを言った

「正解は・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・あんたの後ろだよ」

その答を聞いた男の人は思いっきり後ろを向いた

本当に私の言葉通りあの余裕なニヤリとした笑顔で男の人の真後ろで立っていた

そしてレオの獲物を狙う飲み込まれそうで吐き出されるような鋭く不思議な目を見た

さっと男の人は思考を安定しなくなり

無我夢中に殴りに掛かる

レオはひょいひょいっと避ける

「シキー、バラしちゃだめだろう？ まったく楽しみが消えてしまったワイ」

ウソ付け?! これが作戦だったんでしょう!?

あんたが飲み込まれる寸前

『なあなあ、あたいやツの後ろに行くからね。ちょっとこわい感じにしゃべってくれたら私うれしいわん』』

とか言った癖に

てかもう普通に目だけで語り合えます

不思議だね

まあ、とりあえずため息を出す

さっきまで本当に真剣シリアスな空気がまとっていたのに

作った本人が壊しちゃったよ（汗）

ため息がでるわ〜

レオがふざけた台詞を言っている間も男の人の攻撃がどんどん鋭くなっていたにも関わらず避け続けてゆく

そして男の人が鋭く音より速い右ストレートを振りかざした

パンツと拍手をするような音が聞こえたがレオがああ鋭い右ストレートを受け止めた

その右拳をレオの手から逃れようと力をふりしぼり逃れようとしていくけどなかなか抜け出せない

彼がバカ力なのかそれとも男の人の力が弱っているからかなのかなでも男の人が叫びだした

「この、コノ、コノ、コノ、このヤロウ！？！？！？」

するとあの嫌な空間の色のもやが男の人の体を包んだ

レオは危険だと感じてつかんでいた手を離し、その場から離れる

その汚く気持ち悪い色が男を包み続ける

いえ、あれは飲み込まれているんじゃない？

ジュウウウウウウウウウウウウ・

焼け焦げた匂い

後、肉が腐った匂いもする

う、気持ち悪くなる

なんつーコラボレーション?! (いやコラボレーションじゃないからね!)

ボコボコボコボコb

その飲み込まれて見えた男の人はもう人の原型を持っていなくて

まるでヘドロをムリヤリ形にしたもののようだ

まあ、実際はヘドロより厄介で怖いんだけどね

「あららのー・・・これはこれは暴走だな、これこれは暴走ですな！」

と何処からか武器をだした

それはついさっき私の髪の毛を切ろうとしたナイフ

いったいこれをどう倒すんだろう

私はちょっと不安になってしまいムンドを抱きしめる

「にー」

ムンドはそういつて私の頬に肉球をポムツと置いた

心配するなとも言いたいのかなと思って私は彼を見た

彼はナイフを通して暴走したソレを攻撃をした

ソレは少しだけ削り空間が修復された

それを何回も繰り返した

でもあの気持ち悪いモノは増えて行くばかり

ブクッ

ボコッ

ソレの一部である液体がこちらに流れてゆく

き、気持ち悪い!!

私はつい叫んだ

「レオ！！ 何やっているの！？ 早くしないと私たちまでソレに巻き込まれる！！！！ どんな方法でもいいから早く倒して！！！！」

ぞわおわ

ひいひい！？

本当にこの液体あの気持ち悪くて汚い色しているし

あのいやな感覚がするからもう本当生理的にいやああ！！！！

と思っていたら

彼はまた隠れた

そして今度は先ほどより低くて冷たい声

「お前は王になれない。人の事を、この世界を下僕としている奴なんて小生は我慢にならないわ。この『世界』を甘くみるな小僧がぁ！！！！」

と叫んで彼はソレに突っ込んだ

なにも作戦なしでその行動派無謀よ？！

死ぬ気なの！？

私はそう思った瞬間

ザシュッ

ソレは横と縦から真っ二つになった

あへ？ い、生きているの？

彼の事をちゃんと見ると彼のナイフの刃の所が黒と白が共鳴しているように成っていて

まるで剣のように長くなっていた

フラリとこちらに視線を向けたレオ

その目は吸い込まれる色合いをしていてとても惹かれた

その瞳を見続けていたらポオオとやわらかい光がこの場所に輝き始めた

一番光っている所を見るとその光はさっきまで私達に攻撃を仕掛けたソレ、いや男の人が倒れている場所が光っていた

男の人からその光が出てきた

でも少し気になった事がある

光のはずなのに色あせて見える

はてなマークを飛ばしていたら抱きしめていたムンドが行き成り暴

れだした

興奮している？

と思い私は解放してあげたらムンドはまっすぐレオの所に行った

ムンドがそっちに向かっていているのを分ったレオはムンドを持ち上げ
あの色あせた光に近づいた

そしてその光を素手で掴んだ

. . .

!!!!!! 今光の癖にムギユってなったよ!?

そしてレオよ

何でさっきまで私達を壊そうと、狂わそうとした光をこっちに持つ
てくるの!?

いや————!!!!!!

っと立ち上がってそれから離れようとしたけど腰が抜けていた事を
忘れていた

うわ! 最悪な展開

な、何をする気!!!!!!

と思ったら前にづいと顔に近づけさせた

「近づけるな――！！！！ この光さっきまで 私達を攻撃したものだよ！！ しかも光なのになんでムギユってなったの！？」

「この光に触れ、シキ」

いや何ですか行き成り！？

触りたくないよ

「さわってー」

いや！！！！

「さわりなさい」

いやあ！！！！ 触りたくない！！！！

「触らんと危ないでー」

今、触ったら絶対攻撃される！！

「しねえよ、コイツはもう大丈夫だから・・・」その前にナチュナルに思考を読んだよね！？」わー、バレたおじゃ」

おじゃじゃない！！！！

何で私がこの光に触れないといけないのよ！！！！

そう思っていたら無理やり右手を引つ張られてちよつと体温の低い何か暖かいものが手から伝わった

ドクン

ドクン

ドクン

ドクン

ドクン

心臓の音？

いや、なんだろうもつと違う気がする

生命の音？

これも違つそれよりもつと何かで溢れている気がする

じゃあ、これは何？

そういえばこの音がゆっくりすぎる

大丈夫かな？

何かほつとけなくて自分の『力』をあげてあげるから頑張れ！

そう思つて『色』をソレに注いだ

ふわぁつとゆっくりゆっくり注いでゆく

まるで赤ちゃんの背中をポンポンと優しく撫でるように

頑張れ、私がいる

こんな事しか、色を組み合わせることしかできないけど頑張れ！

そうおもって足りるまで『力』を注いだ

終わったらいつの間にかに閉じていた目を開けた

そこにはいろ鮮やかに輝く光を私の手で触っていた

「・・・ぎゃー！ー！！！！ 私いつの間にかにさわっちゃったよー
ー！！！！」

グレア

あれ？ 視界が安定してない

どうして？

「初めての『力』を全力で注いでみてどうだったか、シキ？」

「ち、『力』？」

そんなもの使った覚えは無い

「『色』をこの世界に、お前が住んでいる『異世界』に与えただろうっ？」

私が住んでいる『異世界』に『色』を？

あたりを見渡すところらに流れてきたあのいやな感じの液体も

レオが修復された跡の白と黒も

あのいやなにおいも

気持ち悪くて汚い色の空間も

すべてがなかったように『色』が生きているように見えた

．．．目が悪くなったのかな？

だって頭がぐらぐらしているから分らない．．．

ああ、ていうか、もうムリ

眠い．．．

「も、もう．．．こ、れいじょう、は、む．．．りい」

そう言って私は意識を失い

色の事を考えながら黒い世界に行った

最後に黒い世界に行く時

「あなたのお陰でこの異世界は安定した。グラッシャ・・・シキ」

と言心地いい低い声と暖かい体温が包み込んで

私は笑った気がした。

不思議な画家の少女 参（後書き）

この小説を読んでもくださり、真にありがとうございます。
楽しんでいただけましたか？
感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7082s/>

異世界管理人LEOPARDO

2011年10月9日18時07分発行